特116
712

金札
大江山
忠勲
知章
俊成忠度

十一

255
548

始

特116
712

大正
1.9.5
内交

五月 切能 金札 シテ 天太玉命 ワキ 勅使

七月 五番目 大江山 シテ 酒呑童子 後シテ 鬼 ワキ 頼光 ワキツレ 侍者山伏 能 酒呑童子侍女

九月 切能 忠盛 シテ 竜神 ワキ 勅使

二月 二番目 知章 シテ 男 後シテ 知章 ワキ 傳

三月 二番目 俊成忠度 シテ 忠度 ツレ 俊成卿 ワキ 同侍者 同従六弥太

ワキ三人 第上 風流 ヲ 中 さゝ枝そゝ乃ゝ 中 地 抑是の植

武天皇子仕へ奉る下也 扨も山城

國愛宕郡の平の都を立置給ふ

出安全乃みぎ寺むさり 同く南國伏

見の里の大宮作り多べきの勅設

金札

夢り。唯今拝見ゐて向仕作
（上歌三八）
嬉しきうたやいだちらべく洗まつ
陰ゐ指居て。風も嘯くとらの時
神の告をも結てうなそく出端守る
べしわゞ国まれはそらだの万代いつ
（上地寺上）
やゝ限らず限らじあるべきぢかい
ゆるぎ御代守りゐ君たゞ

重くきよ神と君（上月寺上）初もくきべ
やく扉も（上月）主ゐ此の神仏光
（上月寺上）もつらきゐ四海を治
めゐ内宮くあらるゐ君
ちまて（上地）八百万代の宮なきや
悪魔降伏乃弓の月弓（上地）極又
行ぬゐちだ魚（上月蝶）あらぶる神も

大江山

ワキ次第
秋風の音にたぐへて西川や雲も行
なり大江山 ワキサシ 抑是ハ源の頼光と
ハ我事なり扨も丹波国大江山に
鬼神の事占かたおもとはに任せつ
頼光保昌に仰付られ ツレ同 よりミつやすま
さ申やう縦大勢なりとても人倫な

らぬ仕業のいかゞとちらひよせ
ぬきぞ　わきまへよ細乃ほとゝぎす
乃まぐちより出立て　胄ぬぎあ
乃市を見　わきよりひあらぬまぐかを
や　長なげ　敵まる後とあひ　わき
ぬしくの頼光保昌　きぐちより
まを忠左を細公時　まつ名をひかる

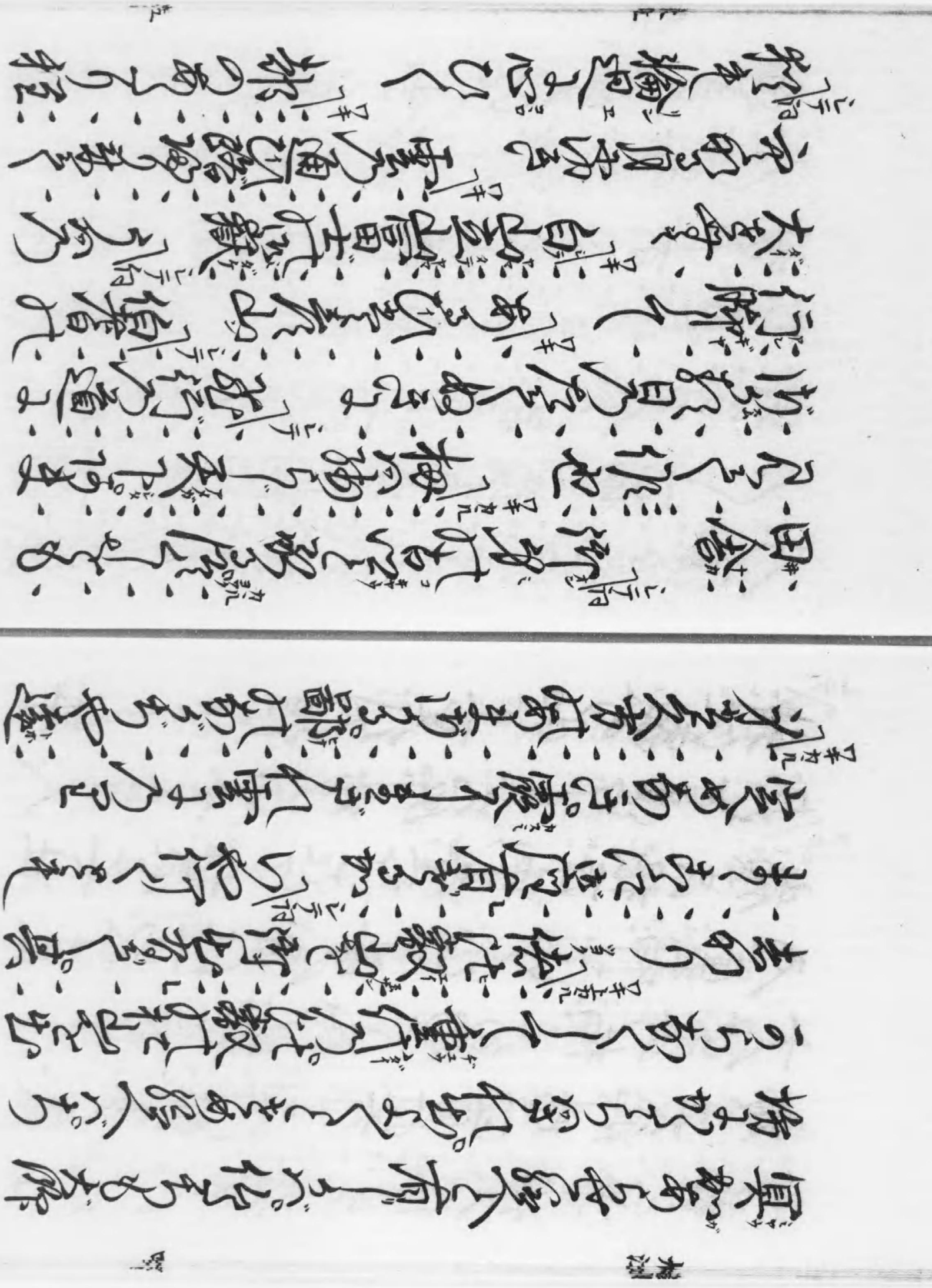
ゑりの者　ワレ月　紙是以ど五十人
まぶ者のうちて分れ　月乃都を立
出ぐ　行はを西ノ下やなぐ
風ぐて　ぐちゆうみぐもたのまや
鬼神なりと大君ぐてもあぐかる
あらぐ　ぐ紙ゆきやなり　申出ぐ乃
山よ　ぐ　いて童乃ぐ庭

有りうの童子とよぶ物すがする去ぞ
山伏もち出て海へ入ばが一夜のお宿をあるせ
給ひ仕て仕とし山伏達乃夜れお宿
やうばやうらめやうに植武天皇より御備
申れ出ぬ嶽山を出より出家より手
をはじとかくの御中をなり中
門乃ほとれ廊よりめ中へ入て宮

僧達仕くよりいづくへ御面り仕へば
此陰家へ内出ぬてそ脇仕
是乃能芸表山乃宮伊まてんが麓の
を山杉んだらより道よ踏まうひ前
後を立て左ぶ所ぬ嶽よ雲れれ
やど行ぬ立ん祝言申仕名を
酒呑童子とヤル仕

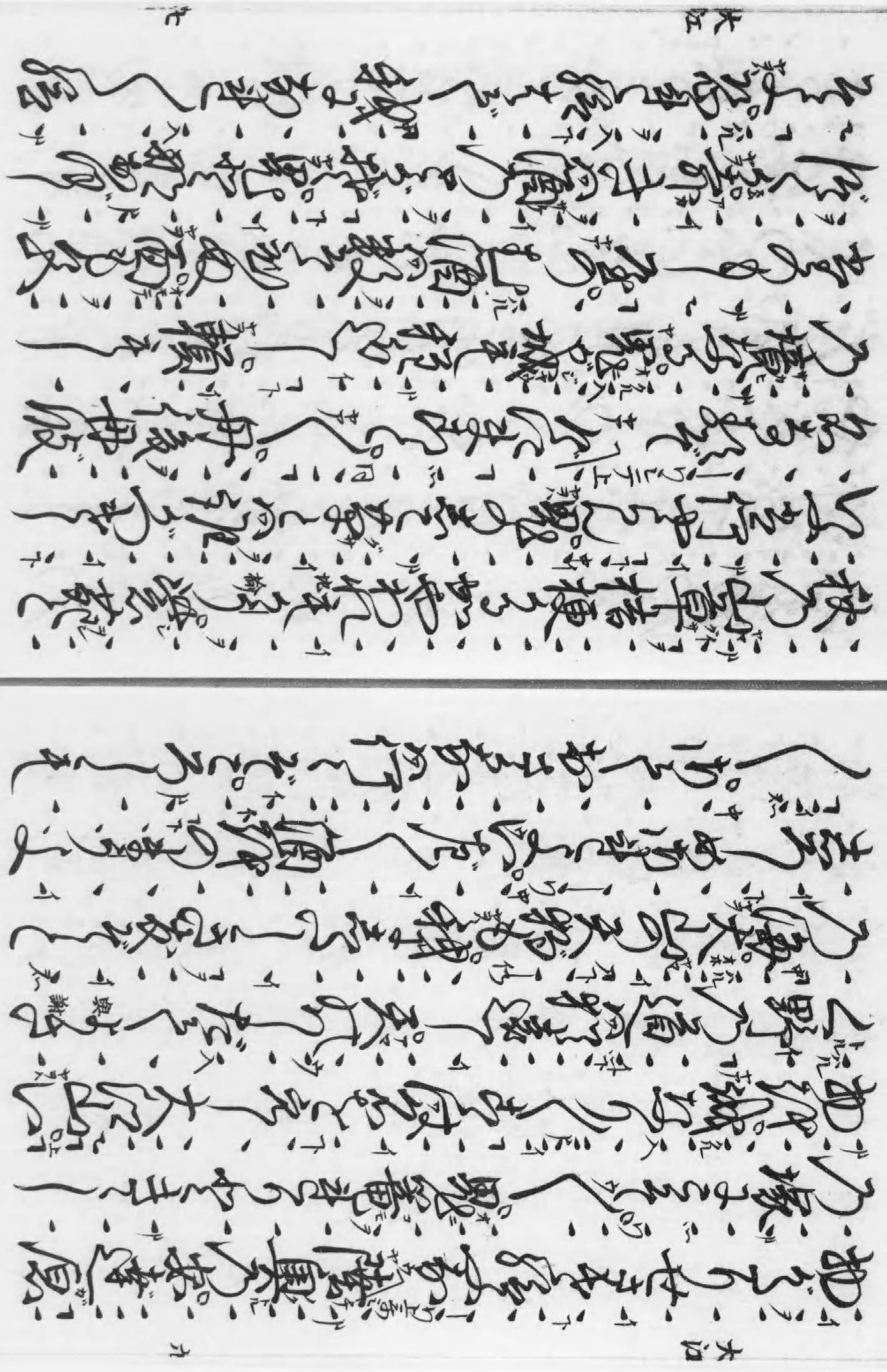
作ゝで我ら石を酒呑童子と云ふの
鳴雷酒と称宮ゝ寄りぎんぞくだ
よ酒呑童子とよばれんばさきばは弓矢
尺ゝ矢と問よつきくゝ酒屋ど面白き
まつのあくゝ宮傷をもきこゝ呑きゝ
伝ふてゝ程よ一ゝ下されべゝよけ山
をいゝゝ乃ばよりは酒居住ふくゝぞ

我と叡の山をとゞ重代ゝ住ゝこゝ年
月を経ゝよゝ大原坊といふえを人
嶺よゝ根本中堂をたて麓よ七社
ゝ霊神をいたゝひ奇ゝて一歩よ三
十町ゝの楠と有ゝく奇瑞と見き
廟よゝ大原坊一首は奇よ門縁多羅
三観二音提ゝ仏ゝ我ゝ松ゝ



迫き洗ひ山り竜居く忍ぶ
くの浄住居かくまして
かり所よ今宮傷達よんあらされ
中通力を失ふぎちあり心景く
男子ぺり那まる有まで
くに筋よ頼こ中で一樹の陰一行
乃流きを沒くまく心の中来意懇

乃行人とたまくまく汗深抜き
きより出家ちもち意ぶきちき
が出そぐち さきも意形乃ぶちれべ
あされ給へ神だみも一見二山王と
たくきまよの神沈さるよりぞか
当の宮傷神き意形乃ちきばなど
あされ給ぐちまへく人寄みて



あれば世に命ハ君にまかせ神國氏
社南無やハ幡山王權現ら力
をそへ給へと願光保昌綱公時ちか
こゝ出来たるひとりもやをひとり
みこゝ出来たるこゝ又ろこゝ
ばるとゝとゞまる之りめらぎ稲妻震
動あひ又こゝ引て後ニテ上ニ情あるこゝ宮傳達

ばりあらどこゝ出つる鬼神ハ横道
ばるきあ鬼神ハ横道あるとや
中ニテ上ニ
頭ばるの地ハ出ぬ人をとり世ち
まびとの成げるぞ我ハ音ハ岡
ばらん保昌ばたちて独り武ハれて神
なり先ハ出来ぬ勅命

二刀三刀ちりとなしくに
かるおとち
からえいやとかへしさそいまはへる罷
神を押つあいわれる音とぢ打れて
ぢ口の山紙鉄つ蹭ヨキそらく都へとて
こうかへりくるき

岩船

宝治年中上

宝治年中四方の国々開の戸
ひらくでかよそくん　抑是の當ふふ
仕人皆所也扨も我君賢王子
まりまたよりぬの風枝をあらそび
民戸ぞ切ひりぐ城の日出度代
みてぐ去る損別住吉の浦の和て

濱の市をこそ唐土の寶と賣
名べしとの宣旨を受け給へり津の
國住吉の浦より向ひは　上ニ　寶今
とても神の代の代なれども　ちはやぶる
きるとて神と君との御惠に滋成
ぬ　早苗　我が見る男
よまもりて神とうやまひ君と守る

煙津橋の下の竜神也　地　あるひは
神代のうきしいとうりつ　地　治る
代より出る　地　寶乃宮と守護
しなり　地　勅　寶
毎　上地　寶地より波の鼓指と掾
てえいやえいや　地　ひきや岩戸　地　あ
まのちくめ　掾　波のうち　勝　鼓　ていい

とうの柏ゑさ。ずいぶんありやけぐ屋浪
ゑめぐり廻りて。位言の松ゑ
ゑよをよえいさ。うえんそらえいけと。
ゑやうらゑのく。湖乃満くる波ふ
うらんで。八金大竜王の海上よ光ゑ
ゑ母乃法ゑぐくを手ふくりうらまた
塩ふ引き波よの月て。ゑぐ居ゑ目

出度位言乃岸よ。寶の山母をつき
をさめ。数ゑ。数方の指物。くあひ出
ゑやうくろ黒ゑぐく。白銀珠玉の数
里ゑちて。山のごとく津守乃浦ふ
君ゑやりゑ神ゑ。ゑ世まぐ栄也
ゑ陽代とぞ。ゑぐふるまい

日暮れ方

知章

雲と心入れまくらべつゝ

撥よ出でうよ

思ひ出の西国方よりいぐ

たる僧まてい。我未都をみぐ

ぱへう思ひ立宮古一見と心ぢ作

上ろうりはびとるかもの

撥家ぱ重ね塩路をまぐくとぐ

ぱ生ぬ有りと行ぱの雲をそ名ぱ

奥津船我れ浮世の道出でゝ行く
とまりの海ぎはの浦ある関よ遠て
けりく梅の我郷の国よりする
ぎまと昌成議遠よ来てみれば
新しき宰相家を立おもてり
おさの人乃遠善とわたぼくく要
文掖ど出たる物故平れ知章

知章

とかたり知章とは平家乃門
乃中みてうまし
弱んぞら痛やゞ あゞくは傷
出行ずを行ねど 日の高国より
よりたる信みてゞ是宰相家をみ
きば物故て平れ知章とは
門乃中にて作やゞんと

痛わしく存じ、遍ろの会佛をと願ひ
て、京と東国の人々まゐり集べ
出家、発心の理り知る者と成
相国の二男、新中納言知盛の子息
みてゆ。二月七日、大原の一谷よ
てうち出さを行てゆ。きべ其日を
けるあり。死べ。ろ乃人の立

たる卒塔婆みてゆ。時もこそあれ、僧侶
ぞ、一本の家よ。まり給ひ。世間の
方、独りよ。一樹の陰、一河の水、
見しも他生の縁成べし。能く弔ひ給
ひ人、京と他生の縁の
あきて社。如なら家よ。
無縁の利益と。あ事よ。

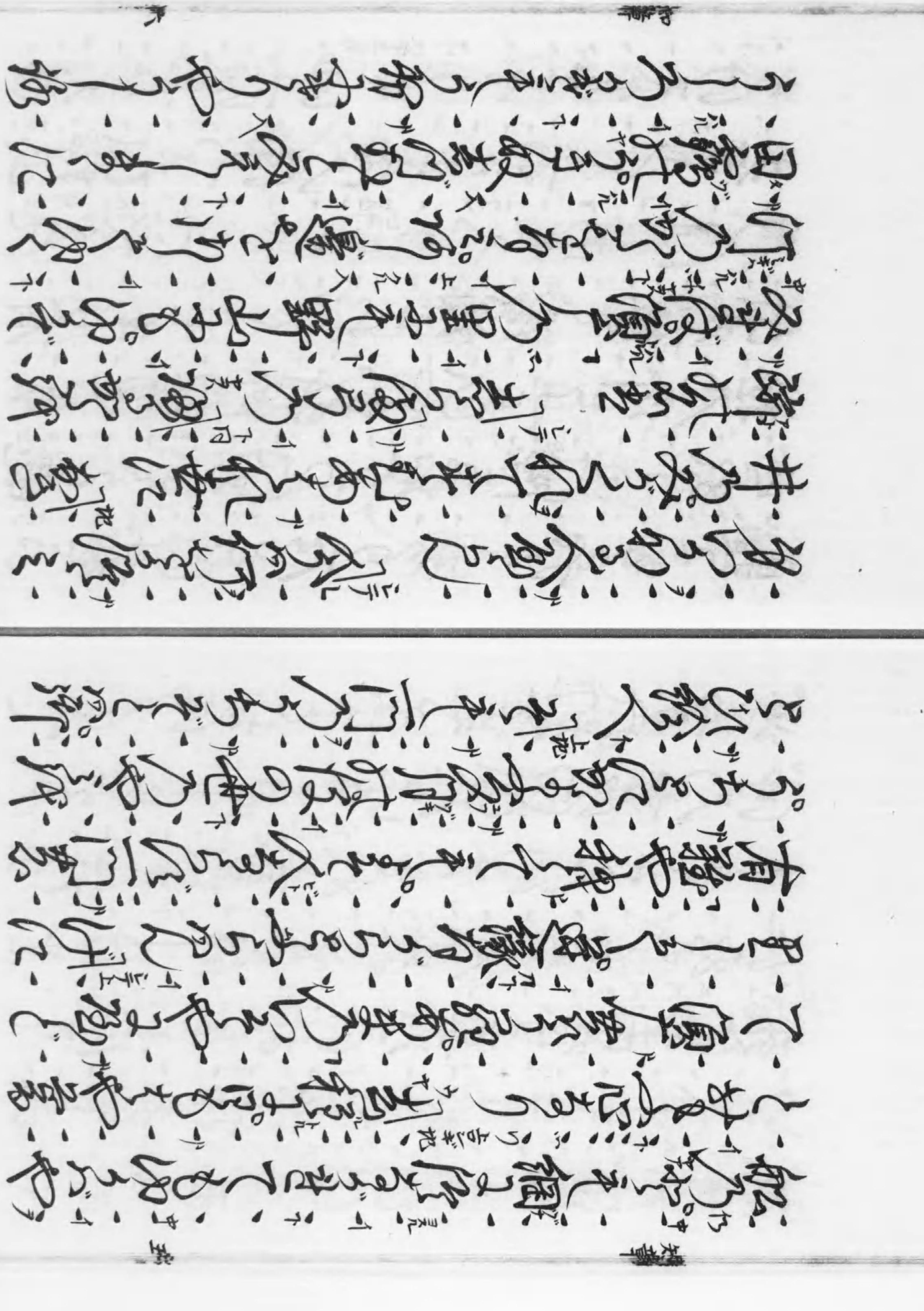
男

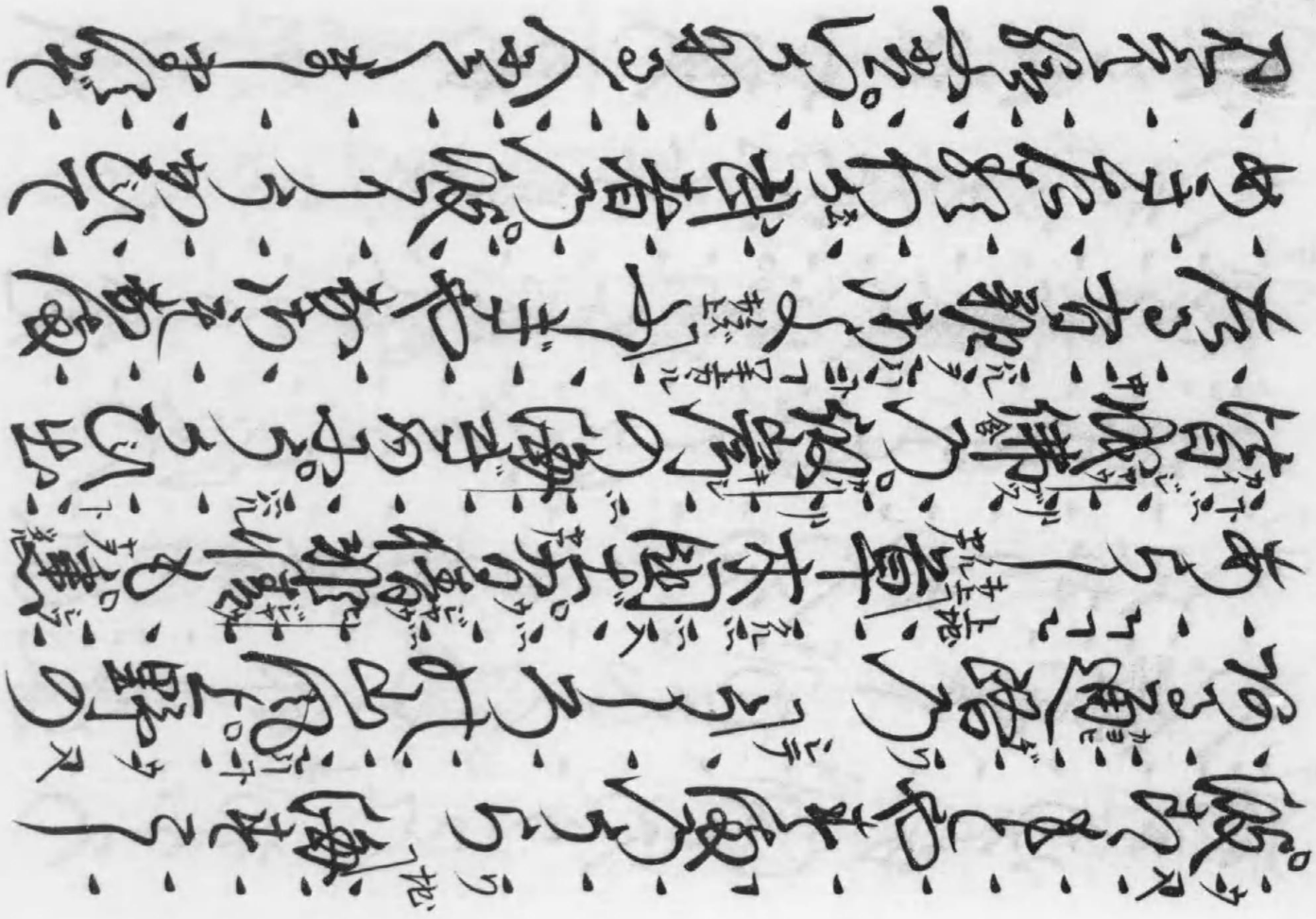
の御法の教へまで　とふらひ給ひたる
あまたに一見卒都婆永離三悪
道かきやうざうりうふしや必生安楽国
物故平の知章成等正覚　明白
まへあんよりの我をともしらぬ身の志す
も弓馬の家へあらば法にひらきつ
仏果に至り給へや　唯一念のくりた

たまく三悪の罪は消ぬべしまし
て妙なるそもとく法の道のほとりのあ
き路を逆縁もなをがあされまく
扨知盛の御最期の何とかあらん
給ひてゆぞ　さて知盛の御事は
みえたる釣舟のほどありし遙かに
沖の御座船に帯を付たまてかかり給てゆ

扨あき人の小船よりめをかくいう
いや馬にみてはいひ〳〵ぶ其比年ハ人
黒とろくろのまやうに名づくるたり〳〵ず
二十餘町の海を面とす昌こゝあり
ぎりとりぬ〳〵と書たき〳〵馬やぶれ
どこそ船中に所あり〳〵向ぶまを人
もゝく〳〵てぶなゝ乃行よりなだあぐり

此馬を其男とき〳〵ふうとなぶ
沖乃方に向ひたらはるきり〳〵見ぐき
しろくぞたゝりきあ。書類を心なり
けあよとぶるく人泉をまゝ風けも
越島南枝より巣をけ胡馬小風不
いぐ〳〵そきすうと思ぶ沖名あり
胡馬の小風とき〳〵ひ〳〵るの面よ拾く





シテ内 祝ひ度ものやあるつのあり。海吊ひ
乃方がきたれば知章是迄来りたり
ワキ詞 極楽寺家乃公達をぞまねあらむ
ここにて待てるうら波乃
なまぬるまとぞむかうて入るうら波乃
シテ うちなびきあるかたをぞ花よぞまつほひ
乃鎧ぬぎ ワキ 内 ちかきまれやう那る品家
シテ 可きちかぞあ ワキ 須戸乃うらに 上歌 あだろ

あまぬのり乃家やは月乃まどうくぶつほ
繪鴻の去まぐらに船をとそ
ワキ 我氏よ ワキ 智ら 船景乃端ら
波をあつ ワキ 野とくをぞ緒よわぶ
ぶきを捨く西海乃もぐとぶ
ワキ 内 うら乃浪重ねてとひたび捨へく
ちらばをやまよ乃有様乗くぶまの

がりらへ（クリ上地）梅を耐乃有様
かるたつかうる兄名のミぎり
田代やま芝を見みぢ塔乃ぐれ
あ年あびくいるの乃ぢりに
なるる乗るう那（見ト）主（ミテサレ上）二位殿を
きづめぎりぼ外初乃（天）の（臣）の（殿）の（公）子（ミ）
門先を船よ乗（トリノリ）海（公）たうる梅（トヨホ）ひ

ぬ（タベ）塗（ウ）波のう初よう兄（ブ）海（ミ）水（ト）鳥代で
ぬ（ラ）（ミテ上）ぬ中（ナカ）ぬ親ぬくい新（ビン）中（チウ）納
言（ゴン）様知章（ケン）盗物（モノ）大郎主（ビンウ）後（サン）二弾（ギ）よ
うちぬ（ト月）ぬ（ゴ）ぬ（ザ）ぬ（ブ）船（ブネ）とうぐ（ブ）ひ代（イ）行（ギ）に
打（ブ）出（ブ）りて敵（ブ）手（ブ）ぎくかるる間
ぬ（ブ）ひ（ブ）ぬ（ブ）ぬ（ブ）うちあ（ブ）程（ブ）よ。知章（ケン）盗物（モノ）
太郎（ブ）を浪（ブ）あ（ブ）く詞（ブ）（ブ）する（ブ）（ト）（ミテ）それ

隙は忽ち二十余町の沖に乃んえ
たる大臣殿の御船迄馬を泳がせ遊ぎ
つゐに御船に付たりしかもひあまる命
拾り給ふ知盛を附よ大臣殿の
御前に参て涙とあかしの給ふ武
蔵守を討れぬ監物太郎頼賢も
あへなく討れ候ぬ我刀を捨て是迄
参りたる面目もなき次第也いかに成れば
子は親のためにとはいまぬ心ざしや
あまたもあきれはてゝ子の討るゝを見捨
きん命をしき物ありとてかねざめ
此御詞に人々の袖を涙よりけり
そもいかなるもの成とて武蔵守の手
とよりもさこつも剛にくしきよき大

将とかくしてこそ、御子清むねの方
を追ひやりて、御船に泳がせ給へば船の
中にて取らるる人々も、鎧の袖をぬら
しけり　武蔵守知章の生年
二八の春なれば、きよ宗も同年に
て共にわかき桜の、それぞれ花の世を重
ねて散りゆくや、異果連枝をつらねつ

一門かどをならべても、おくれし花ふ
のからわきぞ、所も源の山桜、もろ
衣と散りぬ埋木の、ちりすてゝ今ぞよ
船人となりゆく果ぞ悲しき　げに
痛はしき物語り、同じ御宰相殿
懺悔をかはり給へ　今や宰度
の有様を、げんぎのおもむきにてあらはし

彼器量の苦患まぬがれん　上地　ぎて
彼器量過ぎるまで　その一念も家業
より　いつまでも　敵ながら　地　其
やうに　浦の波　月に八月十五日　風の　の
てだまかうかい　と云まして　盗物
太郎が　放つ矢に　敵の　そこ　に
頭の骨のごとく　おいさせて　高遠様に

やうと　言きべ　主人と　打ち　き
武士　新中納言を　見て　引き
やをよ　ひてうつ　敵と　親　うせ
と　知章　中　ふさ　ぬ　ん
で　ぐう　かて　ち　知て　あさ　て　頭　知
切て　て　あ　る　ぬ　と　敵の　郎　お
高人　て　知章　げ　頭　と　れば　ま　家

ほうたきつぼ、俤、羅の葉よ
沉むと思ひなして、御傷のたゆらひ
さ有難や、昔ぞ世の法花友よ。
きぞきまゝの、袖章ゞ、ひらくた
びらへ、なきあとを、とひくさ、ぞ行へ

後成忠度

平内

加賀國の住人、園部
九六郎左忠澄、まそい。極そ今
度西海の合戰よ。薩ノ守忠度を
い果ゞ手に無ちひ、てゝ。御家の
段矢籠をとれ、はさび。短冊の所い
ゞ、ゆ、へ、五条の二位後成卿と和

歌の道値遇の由申し同道短冊を持
て参り候成ば首尾能やと存じ
いそぎ業中仕候 扨ふるわりいで
是都は古歌忠度が参りたるよ
ひ中しく人 心ばせ申し仕 何
ふるく有ぞ 国部は古歌忠度の句
候申ありきて 後成 いざ方へと申へ

是ふるいざ方へ参り人 心ばせ
いそぎ忠度ばかり只そば行為よ参り
給はて仕ぞ 扨んば只今参る事
彼の俤よりなら西海の合戦より薩
摩ち忠度を尋べ某が手に事出ひ
申てい所家の乃ち志ごを見人べ
短冊の品ぞ 是へ忠度と深のらぬ

和哥の値嵩この由承はる。御目に
かけてやうやうねがひ奉りもちてまゐ
りてはべり。後世方へ給りたまへ。宮やう馬
の道ならねどいたづらに世に経ぬる
置給ふ。ものの紙きよ。行く末の宿乃花
ゆえ立題ゆゑ。行末長く。頼みて求めてかげを
宿とせば。花やそ雪の夕暮あらん

上書

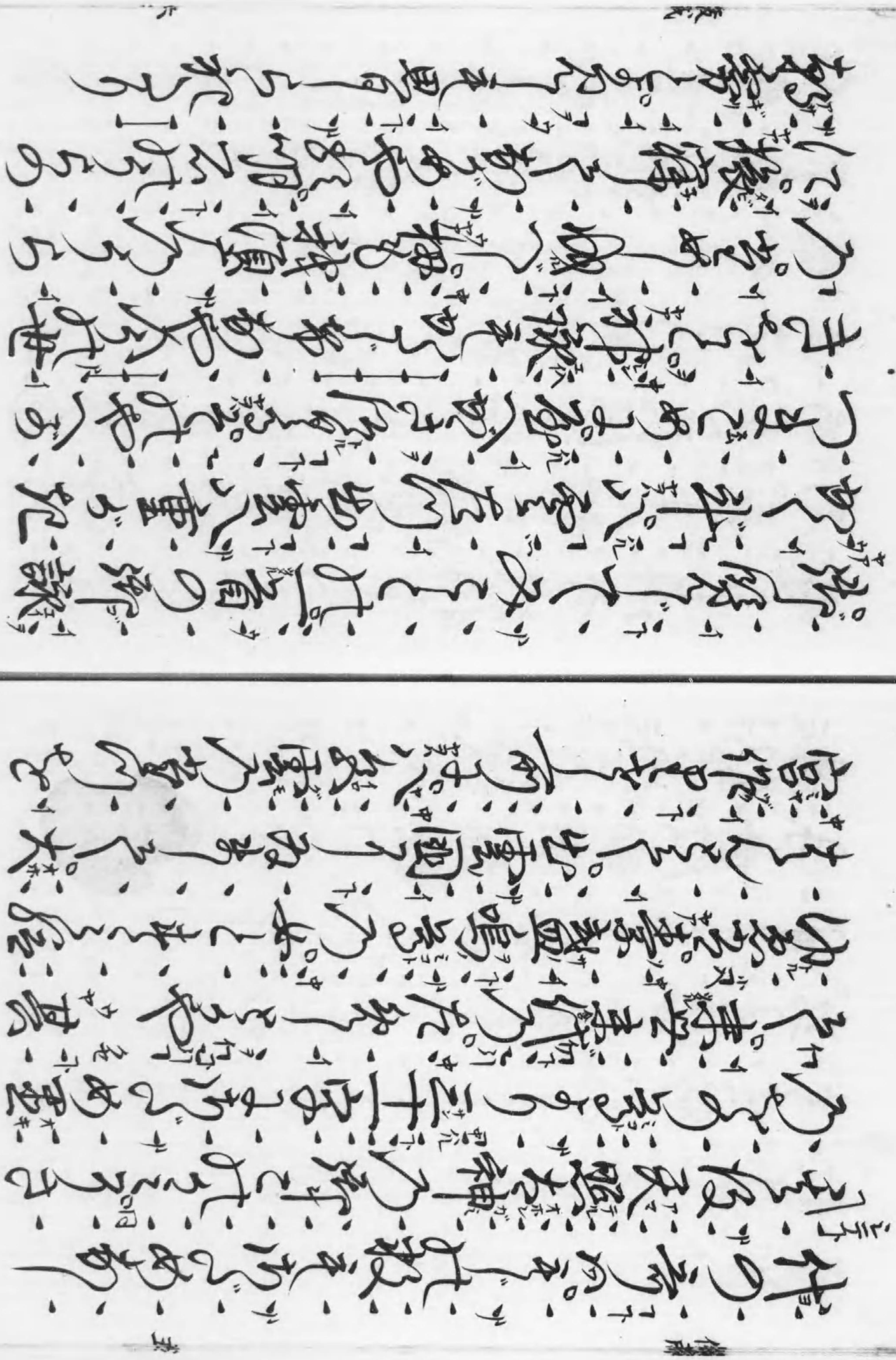
痛りや忠度朝臣。波瀾むざんの罪
とゝ思ひ。仁義礼智信五乃道もたゞ
ちくらく。奇道より幸道者ゆゑ矢よ
ひあぎ行くべき。武士二道乃忠度の
知とそらく。彼岸の墨よりたる海
和やく。せんど程遠し。思ひ
のむざんの雲に馳せ重ね塩

[illegible]
ひろきぬぬに[illegible]
やはらぐ[illegible]命[illegible]
行のわち[illegible]
後撰上カル
後撰[illegible]
不思議やあ夢[illegible]
[illegible]

ぎちよ　後撰千載集よ一首[illegible]
を[illegible]
潰人[illegible]
後撰
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちこちと雲つゝ花世をも哥
あらべ　後　こせをゝ流石むさ
ゝ　後　秋人の　情をも
をかれもあらじ　後　哥をも心あま
をゝ　上三月　ちゝ波やを
古ゝ乃花とゝ髪ゝ
賀ゝ都もあれ　ゝ　ゝ
ゝ　山桜ゝ　ゝ

ゝれをのゝ詠哥のゝ
ゝ世間電光ゝ胡蝶乃夢ゝ
きゝ　上　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ波ゝ
ゝ　上後サレ
ゝ
ゝ
ゝ



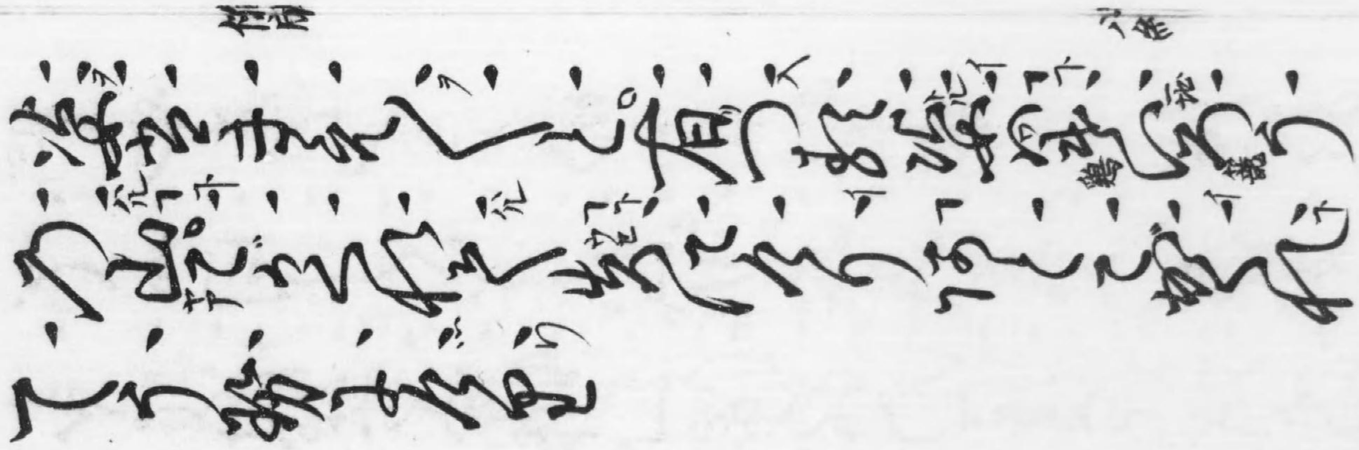
作月

人麿世になくなりて歌のことゝゞまらざ
りしに紀貫之も躬恒もかくこそ
出かゝるとも松の葉のちりうせずして
まさきのかづらながく伝はり鳥の跡
あらん其ほどはよもつきじ和歌の道
の歌は神も納受男女夫婦の
仲だちとも成べき情あるべし然る所

をしの寝覚やかな ふしぎやみ
れば忠度なきかげりて気色き
名様であるもいつはるやらん ふしき
所詮ありて修羅王の梵天に責のため
あらそふ帝釈出あひ修羅王とそれしの
下界にありくるぞその敵陣をみだれ
あひくめきありきくべば忠度も頭

主の婦の芸藝の波のうち花抜き
切くかきば敵へ寄を抜へくく
寄給へば忠度あひ向ひ打らへば
そのまゝ敵とうちのひなを花
てたくべ矢より内や車陽より地より
出る鉄刀あるとつらぬきたるまゝ
力をそめらきめ際弱まきめ内いた

傷まや下レテ面かくり波やく志
賀の都の内なるあらけ山
桜ゆと梵天感ゆ絵日より鉄責
を免れてくらやくくり燈と常
きて世の藤と深き月花弘諸
での同じくもと外年ゆ主の夜元
やきらくと明るまれ有り行ま



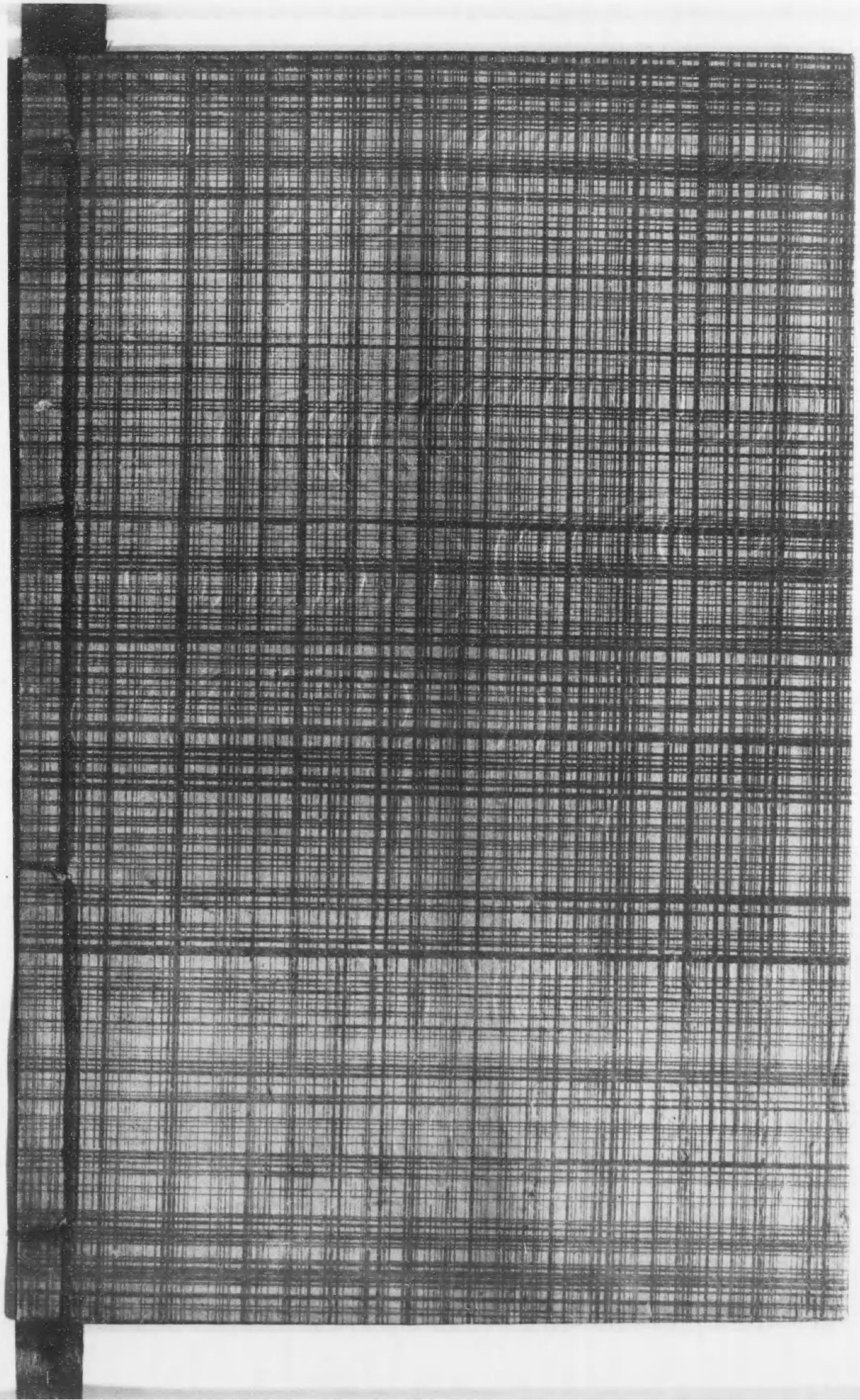
255
548

大正元年八月十五日印刷
同　年八月二十日發行

復製不許

再訂正者　觀世清久

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂

終